

末野窯跡(大里郡寄居町)

すえの

この道の右手の木々が生い茂る斜面に末野窯跡があるらしい



二件の住宅の左手角に説明板が立っていた



埼玉県指定 史跡

末野窯跡

指定 大正十五年三月三十一日

所在 寄居町大字末野二二六三一

この付近一帯は、六世紀から十世紀の頃、丘陵の斜面を利用して「のぼ登り窯」が数多く築造され、須恵器すえきや瓦かわらをつくる関東有数の窯業ようぎょう地域として栄えていました。

現在、この奥にある木造の覆屋の中には、当時の窯跡が保存されています。

規模 長軸 三・五六メートル

幅 一・〇五メートル

深さ 一・〇〇メートル

平成七年三月

埼玉県教育委員会
寄居町教育委員会

ここに入って行く



竹藪を掻き分けて進むと小さな建物が見えてくる



ここにも説明板が立っている





相定 史跡

野窯跡

寄居町大字末野地内
大正一五、三、三一県指定

須江野すなわ陶野である。

一帯には多くの窯があつたと伝へられ
破片が出土している。当地の窯の形式は
いであるから、何れも丘陵の脚部にあつて
田を利用して居る。附近にはいわゆる祝部
器が取乱し、国分寺瓦窯跡とともに
が上代における陶物製作の一中心地を
いたと伝へるものである。

昭和四十八年三月三十一日

埼玉県教育委員会
寄居町教育委員会

この建物は窯跡の覆屋であった



中を覗いてみる



これが末野窯跡群の一つ





左手に石を積み上げた碑がある





これは斜面の上にある道路でこちらからも覆屋へアプローチできるかもしれない



覆屋が竹藪の中に見え隠れするが急激な斜面となっており、こちらからのアプローチはかなりハードである



さて、ここは近くにあった「西行戻り橋」



西行戻り橋 由来

歌人として名高い西行法師は、源頼朝と初めて会った時、「もとは佐藤兵衛尉義清（さとうひょうえのじょうのりきよ）今は出家遁世して西行と号する者」と名のつています。この西行が寄居町末野にやって来たのは、秩父へ歌の修行に向う途中だった。末野を流れる逆川にかかる土橋まで来ると、子供がシヨイコを背に鎌を振り振り渡ってきます。そこで西行は「小僧、どこへ行く」と問いかけました。すると子供は「冬ぼきの夏枯草（あまぐさ）を刈りに行く」と無造作に答えた。西行は「冬ぼきの夏枯草」とは何んのことかわからず、困ってしまっただ。子供は西行の困った顔をよそに、さっさと行ってしまった。またこの時、橋のたもとのあばらやで、美しい小娘がハタを織っている姿に西行はうっとりときとれ、いるうちに、急にその絹がほしくなり、「その絹を売るか」とたずねました。すると娘は「ウルカとは、川の瀬にすむ鮎のはらわた」とまるで禅問答のようなのです。



そこで西行は秩父路では、少年も少女もむずかしい歌をたやすく作る。自分は恥かしいといってこの橋から戻ってしまいました。今もこの橋を「西行戻り橋」と呼んでいるのはそのためです。

参考ホームページ

<http://www5f.biglobe.ne.jp/~kodai-musashigaku/newpage46.htm>

